

東日本大震災が発生してから6年後に当たる2017年4月～2018年3月に、発災当時、宮城県庁において主に幹部職に従事されていた17名の方々に、災害対応の御経験を伺う機会を頂きました。そのときに教えていただいた2つのことを御紹介します。

一つは、30年以上前の災害対応の経験を語り継ぎ、それが東日本大震災の対応で生きたという事例です。宮城県では、1978年に宮城県沖地震での災害対応を経験しています。この宮城県沖地震は周期的に発生する可能性が指摘されていたことから、主に財政課において先輩から後輩に「あだったよ、こうだったよ」という語り・雑談が継続的に行われていたそうです。

もう一つは、1995年に発生した阪神・淡路大震災の記録が、東日本大震災において活用されたという事例です。復旧・復興に取り組んだ兵庫県職員が直面した課題や、どう解決していったのか、県職員の自らの経験を振り返った記録である「翔べフェニックス」と、阪神・淡路大震災の重要な教訓100項目が整理された「伝える」という2つの記録が、災害対応を行う上で「これから発生すること、しなければならぬことをイメージできた資料」「どんなことをしたらいいかということを考えるよい資料」であったといえます。

これらのことが「みやぎの3・11～現場編～」と「みやぎの3・11～回顧編～」の作成と、その情報源となる延べ612名に対する5年間（2018～2022

年度）にわたる膨大なインタビューの実施につながっています。過去からの語り継ぎが有益だったことから、このインタビューには、聞き手として現職の職員も多く参加しました。かつて、大規模災害を経験した兵庫県のように、いつか発生してしまうかもしれない大災害に直面する広域自治体の道標を提示することを、両書はねらいとしています。

本書の大きな特徴の一つは、その記録のかたちです。行政機関から刊行される災害対応に関する記録誌は「やったこと」「結果」が掲載されるのが一般的です。本書は、「やったこと」「結果」の背景にある「経験した職員の生の声」「実行に至った経緯、または実行に至らなかった紆余曲折」といった悩みや議論・検討の過程を重視して掲載しています。これらの生々しい記録の部分こそが、実際に災害対応に直面した場面において、長期間にわたる復旧・復興の困難な判断の支えになると考えます。地域・時代・資源が異なれば、「過去の経験がそのまま生きる」ということは難しいです。だからこそ、「やったこと」「結果」の背景にある悩み・検討の過程を知ること、実際の場面における応用の一助になることを期待しています。

令和5年3月

宮城県震災復興総括検証アドバイザー  
東北大学災害科学国際研究所 准教授

佐藤翔輔